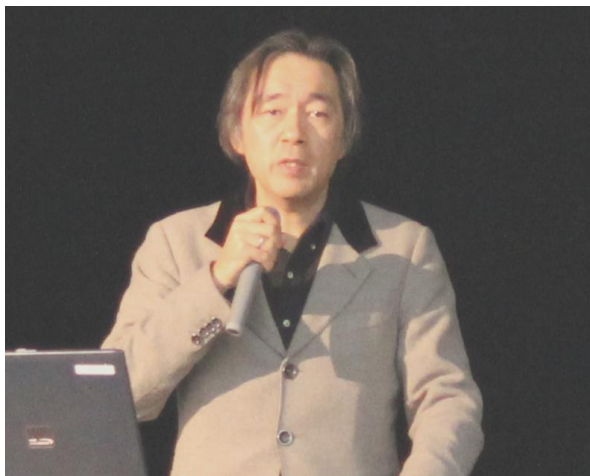


# 2012 ふくやま人権大学

## 講義録



福山市

## 2012 ふくやま人権大学 講義録 目次

---

2012 ふくやま人権大学 講師一覧	．．．．．	P 2
開講式 講演会コース	．．．．．	P 3
人権入門コース	．．．．．	P 5
地域リーダー養成コース		
《中部会場》	．．．．．	P 7
《東部会場》	．．．．．	P 9
《神辺会場》	．．．．．	P 10
人権週間 講演会コース	．．．．．	P 12
修了式 講演会コース	．．．．．	P 14
アンケート		

# 2012 ふくやま人権大学 講師一覧

---

## 開講式 講演会コース

奥田 均さん（近畿大学人権問題研究所 教授）

『福島差別を考える』

---

## 人権入門コース

岡田 英治さん（〔財〕ヒロシマ人権財団）

- ① 部落問題とは ーそして解決に向けた取り組みー
  - ② 国連から見た日本人の人権状況
  - ③ 相次ぐ差別事件とその背景を考える
- 

## リーダー養成コース

### 《中部会場》

桑野 里美さん（〔財〕ビジネスパートナー・オフィス）

思わず誰かに伝えたくなる人権講座

「知らせる」と「知られる」の違いから …相手との出会いを大切にする

浮穴 正博さん（天理大学非常勤講師）

思わず誰かに伝えたくなる人権講座

日常会話、文章の言葉・表現から …相手の存在を大切にする

### 《東部会場》

天野 和彦さん

（元ビックパレットふくしま避難所県運営支援チーム 福島大学うつくしまふくしま未来支援センター）

生きている 生きていく

～東日本大震災ビックパレット ふくしま避難所が教えてくれたこと～

### 《神辺会場》

上瀬 由美子さん（立正大学 心理学部 教授）

「ステレオタイプ（固定されたイメージ）の社会心理学」

---

## 人権週間 講演会コース

栗原 美和子さん（テレビドラマプロデューサー・作家）

「橋はかかる」～差別のない社会をめざして～

---

## 修了式 講演会コース

斎藤 環さん（精神科医）

「社会と個人の成熟度と日本の未熟度」

講演会コース 第1回講座 10月 6日(土)

## 「福島差別を考える」

講師 奥田 均 さん

(近畿大学人権問題研究所教授)



### 1 「福島差別」の創造

2011年3月11日までは存在しなかった差別が、私たちの目の前で発生し増殖しています。東日本大地震は巨大津波を発生させました。その被害のすさまじさは、今更語るまでもありません。しかし、福島差別はその地震エネルギーが創り出したものではありません。大災害をきっかけとして、私たち人間が「福島差別」という社会問題を創り出してしまったのです。

### 2 福島差別の現実

原発事故発生直後から福島の人々に対する差別は始まりました。2011年4月の報道から次々と、新聞にとりあげられています。

新しい差別の発生というのは、社会に対して、パニック的な状態を引き起こすことが見られます。かつてのエイズパニックもそうでした。長野県松本市で、外国籍の女性が、国内初のHIV陽性でエイズを発症していることが報じられました。長野では、銭湯、飲食店、ホテルなど外国籍であるというだけでお断りというようなことが広がっていききました。そこには誤解や非科学的な認識や外国人に対する差別も重なっていました。

やがてこの問題は、パニックと呼ばれるような表れ方は沈静化していきませんが、根強い差別としてはびこっていきます。福島差別も同じように、静かな底の深い差別へと広がっていると捉えるべきだと感じています。

### 3 同じ過ちを繰り返してはならない…差別！反対の声を真っ先に上げた人々

福島差別に対して一番最初に抗議の声をあげたのは、広島・長崎の被団協の方たちでした。内閣総理大臣にあげた、7項目の要請書の4項目目には、「放射線被害について正確な情報を提供し、国民の不安を取り除くとともに風評被害や被災者に対する差別をなくすこと」と記しています。

広島・長崎の被爆者を襲った社会の出来事が、昨年の3月から福島の人々を襲い始めています。自分たちの経験や体験から、それは、単なる健康被害や単なる生活の糧を奪うという、そんな問題だけではなく、差別という問題、ふるさとを語れなくなるという問題、そんなことが起こり始めているということに、真っ先に気づき、この問題を社会問題化するという提起を始めてくれたわけです。同じ頃、水俣市長が市のHPに緊急メッセージを掲載しました。水俣の経験と今回の福島差別の問題を重ね合わせ、問題提起をしています。さらにハンセン病回復者の方も自らの経験と重ね合わせながら、この差別を見抜いていきました。このような訴えが各地で始まっていったのです。

### 4 福島差別問題を考える視点と課題

偏見は潜行しイメージを創り上げます。じっくりと腰を据えて、長期的にこの問題を考えていかなければなりません。そのためには実態把握をすることが重要です。しかし差別の現実、そのことが厳しければ厳しいほど表面化しないというパラドックスであります。当事者が訴えるということは、社会に「自分は被差別の立場にある人

間です」と名乗り出ることであり、その後起こるであろう、さまざま社会の反応を引き受けるという覚悟が求められるのです。

部落問題で言いますと、差別落書きや差別発言はよく指摘されますが、結婚差別などは、なかなか表面化しません。薬害エイズ訴訟は、匿名裁判で行われました。かつて広島・長崎の被爆者の中で、原爆手帳の申請を多くの方がしませんでした。厳しい差別ほど見えにくいということを、これまでの様々な人権問題は、貴重な教訓として私たちに伝えていています。ですから早急に、実態把握に取り組み、表面化していない差別を掘り起こしていかなければなりません。

福島差別を考えると、差別はいけないという立場の人たちでも、陥ってしまいがちな問題があります。それは、安全論に立った差別否定論です。「放射線は、人から人へはうつらない。福島の人、人体に影響があるほどの被爆線量ではない。だから忌避したり差別してはだめなんだ」ということです。しかしこれは、差別を合理化する考え方の典型です。広島・長崎では、健康どころか命にまで差し障るほどの原爆被爆量でした。HIVやハンセン病は感染症です。だから差別をしてもいいのですか？いいえ、差別はいかなる状況におかれていようが、許されるものではありません。

こうした差別否定論に寄り添ってしまう時、原発事故の深刻さや放射線の恐ろしさが強調されればされるほど、福島の人々に対する排除や忌避が強化され、正当化されかねません。食品などで論じられる「安全」の問題と、人間に対する「差別」の問題を混同してはなりません。差別は、いかなる理由においても正当化されてはならないのです。

また、原発の怖さを伝えようとするとき、その例として「生まれてくる赤ちゃんが障がいを持って生まれてくるかもしれない」という議論が目につくことがあります。そこには、「障がい者は不幸だ、生まれてくるべき命ではない」という優性思想があり、障がい者差別に乗った原発否定論になっています。否定したいあまりに、否定の論拠に差別の発想が潜りこんでしまう、このあたりはしっかりと私たち自身が、自覚的に受けとめておかなければならないと思います。

## 5 おわりに

この福島問題は、部落問題、水俣病・ハンセン病に対する差別、広島・長崎の被爆者に対する差別に重なっています。差別というのは、一つひとつ別々にあるのではなく、そんなふうに差別を許してしまう論理、社会の状況や土壌があったからこそ、3月11日、原発事故が起こった途端に「福島差別」という、それまでに存在しなかった差別を目の前で許してしまったのだと感じています。

人権の問題というのは、何か特別などこかの誰かの問題ではありません。社会的な事情がほんの少し違えば、いつでも被差別の側におかれるかもしれません。ほんの少しでも、きちんとした知識、認識がなければ、差別を否定する気持ちの中からかえって差別を温存、助長してしまうような発想が生まれたり、当事者を苦しめたり、当事者が訴えることをねじ伏せるような、そんな社会の一員に自分自身もなってしまうかもしれません。そんなことを「福島差別」は教えてくれているのではないのでしょうか。

＝入門コース＝ 10月29日, 11月12日, 26日(月曜日) 19:30~21:00  
—ここが知りたい! 人権って何?—「部落問題と私たちの人権」  
講師 岡田英治さん(財団法人 ヒロシマ人権財団)

## はじめに

今年度は、日常の社会生活の中に見られる部落差別の実態と、解決に向けた取り組みについて考え、人権の大切さについて講座を実施しました。

## 第1回 10月29日 部落問題とは —そして解決に向けた取り組み—

○部落問題とは＝部落解放のための理論＝「三つの命題」

- ① 部落差別の本質とは、被差別部落出身者の市民的権利が不完全にしか保障されていないことです。市民的権利上、就労では収入に格差があり、教育では高校・大学への進学率の格差が残され、居住では災害発生率の高い条件の悪い地域が多く、結婚では本人の意思が尊重されない状態があるなど、生活全般にわたり様々な差別実態が今日も残されている。このように、一人ひとりに与えられるべき権利が実質的に不完全にしか保障されていない状態のことを言う。
- ② 部落差別の社会的存在意義とは、経済的には社会の主要な生産力の担い手を収奪し、搾取するためのもの。政治的には、分裂支配の道具として利用される。封建社会では農民問題であり、現代の資本主義社会では勤労市民の問題であり、身近な問題を通してよく考えて見る必要がある。社会意識としての差別観念とは、差別観念は差別の本質である経済的・社会的にも劣悪な環境に照応して、一般的・普遍的に存在する。生活に密着した言語を例にとれば、女偏の漢字を見ると「嫁・姑・婆等・・・」社会的に女性の権利が奪われ、男尊女卑の思想に縛られて男性支配の下で低位な状態に長く置かれたいたことを物語るように、マイナスイメージの印象を与える文言が圧倒的に多い事実を見ても一目瞭然である。
- ③ その他、「差別と表現」の問題についてもよく議論される。表現する際に使ってはならない言葉はなく、問題はどの様な脈絡で使われているかが重要である。殆どの場合、賤称語などは差別的な脈絡で使われている。そこに問題がある。



## 第2回 11月12日 国連から見た日本の人権状況

○相次ぐ差別事件を考える

- ① 企業による差別は、1976年に発覚した「部落地名総鑑」事件に代表される。全国的に有名な日本を代表する様な会社が採用選考の際に、被差別部落の地名・姓名などを掲載した地名総鑑を購入し、本人の能力や適正ではなく出身や社会的立場を理由に不採用にするという差別事件である。これにより、就職の機会均等が奪われていた。  
また、この事件で明らかになったことは、差別選考の対象は被差別部落出身者だけではなく、在日韓国・朝鮮の人々や身体障がい者・親族に犯罪履歴や病気の履歴を持つ人・思想や信仰なども含めた身元調査を行ない、様々な人たちが公正・平等な選考ではなく差別による選考基準により、就労の権利と機会を奪われていたという隠された事実が社会的に明らかになった。
- ② 大量差別紙片配布事件は、県内呉市で「〇〇町の〇〇は部落民」という紙片を長期間に8万枚以上が撒かれている事件です。  
また、東広島市では電信柱に「エタ公」と落書きが発見されました。さらに、



府中市では被差別部落出身者を装い、全国の葬儀社に見積もりを請求し、「エッタハイム・〇〇」「メゾン・ド・エッタ〇〇」などと賤称語を書き綴ってインターネットで、偽りの情報を流すという極めて悪質な事件も発生している。

③全国では、戸籍謄本・住民票等不正取得事件は、東京都の司法書士が代表の「ブライム総合法務事務所」を警察が摘発し、事件の関係者を逮捕した。この事件は、司法書士・弁護士など8土業の業務に特別に認められている「職務上請求書」を違法に偽造し、2万枚を不正に印刷して全国の市区町村から約1万通の戸籍・住民票を不正に取得して、1億円以上を荒稼ぎするという全国規模の極めて悪質な人権侵害の犯罪である。犯人の元行政書士・佐藤隆は、公判で「客の依頼内容の半分は結婚相手の身元調査だった」と証言し、社会的に差別意識が色濃く残っている実態が明らかとなった。法務局の通知で県内でも福山市をはじめ多くの市町で不正取得が行なわれていた実態が判明した。このような差別事件の解決に向け、福山市においては今年2月から「登録型本人通知制度」を制定し実施する取り組みが進められている。これは、市民の自己情報コントロール権を保障するため個人情報保護条例に基づき、違法な戸籍・住民票などの不正取得による人権侵害を防止し、個人の情報を守り人権を尊重する行政の責任として実施するという大きな意義を持つ取り組みであると評価することができる。

④ その他、土地調査をめぐる差別事件など多くの差別事件が発生している現状がある。これらは、人権尊重の精神が後退して社会の荒廃が深まり、多くの人々が自己疎外の状況に追い込まれていることを反映する憂慮すべき状況にある。



### 第3回 11月26日 相次ぐ差別事件とその背景を考える

○人権確立（人が大切にされる）の社会をつくるために・・・

①このように差別事件を見る場合に、重要なことは引き起こされる背景を考えることが重要となる。根本的な要因は、市民的権利（就職の機会均等・教育の機会均等・居住、移転の自由・結婚の自由など）が不完全にしか保障されていない現実の反映である。人権を一顧だにしない、新自由主義の広がりにより格差社会が強まる中で差別意識が拡大し、自己疎外の状況が増幅している現状の危険性を認識しなければならない。こうした実態は、国や自治体の部落問題解決に向けた取り組みの放棄や後退が、大きく影響していることを見過ごしてはいけない。



②人権を考える第1歩は、内省・自省からです。自分を見つめ直し、想像力を豊かにすることが必要です。人権感覚を研ぎ澄ますことは、自分自身を豊かにすることに他なりません。

③差別をなくし人権の尊重される社会をつくためには、共生社会＝ゆとりある社会をめざし、今後も共に学習を進めていきましょう。

### おわりに

今年度の入門コースで学習した内容を活かし、「部落問題と私たちの人権」を考えることの大切さを学びました。明日からの部落問題の解決に向けた取り組みの第一歩にしたいと思います。

地域リーダー養成講座 12月1日(土), 8日(土)

## 「思わず誰かに伝えたくなる 人権講座」

◇講師 第1回 桑野 里美 さん〔(有)ビジネス・パートナー・オフィス代表〕  
第2回 浮穴 正博 さん〔天理大学非常勤講師〕

活動により積極的に関るようになることを目的に開催しました。連続講座を通して、人権学習の意義を改めて学び得心することで、人権リーダーとしての自覚を高め、今後の人権推進活動の充実に活かしていただくことを目標としました。

### 第1回『「知らせる」と「知られる」の違いから・・・相手との出会いを大切にする』

講師 桑野 里美 さん

#### 1 身近な人権に、気づく

「人権」問題は、実は身近にいっぱいある。身近な人権問題を見つけて、気づいたときにすぐに行動に移すことができるようにしたい。それが、本講座のねらいである。

#### 2 「ステレオタイプ」～染み付いた価値観

アクティビティ① 後出しじゃんけん「負けるが勝ち！」

本来「じゃんけん」は勝ちを意識するものなので、負けようとするのは難しい。そのくらい私たちは世間の価値観に縛られて生きている。価値観がぶつかり合うところに差別は生まれやすい。

#### 3 「情報」の重要性～気づこうとしない限り、気がつかない

アクティビティ② 自作名刺で会いましょう(自己紹介)

最初に自分の名前と、書きたい人は書ける範囲で“肩書き”を記入し、10分間で多くの人と自己紹介し合う。席に戻り、出会った人の名前を書き出す。

アクティビティ③ 「私は誰でしょう」

自分を知ってもらうための紹介内容を5つ記入し、5人の人と紹介し合う。情報があることで、相手に対する興味・関心が増える。関心が増えれば記憶に残りやすくなる。

関心を持って気づこうとしなければ、気づくことができない。物事を見聞きするとき「人権」という点を加えるだけで違ってくる。(例；車椅子の通りにくい歩道)

#### 4 価値感、変えることができる

アクティビティ④ 「好感度ランキング」

文章中の登場人物を好感度の高い順にランキングし、グループで交流する。各自どんな基準でランク付けしたのかを話し合うことで、人間性のとらえ方は千差万別であること、違う意見に耳を傾けることで自分自身の価値観は広がりをもつ＝価値化は変えることができることに気づく。

また、価値観の否定は人間性の否定につながりがちである。相反する意見が出たとき対立して論議が進まないのはお互いが否定されることに対して感情的になってしまうからである。そこに差別が入ればなおさらである。

#### 5 掘り下げることで真実が見えてくる

相手をもっと知りたければ、社会的ステレオタイプ＝差別にとらわれず相手の真の思いを受けとめることが大切である。

「誰かに伝えたくなる  
人権学習」





## 第2回「日常会話,文章の言葉・表現から…相手の存在を大切にする」

講師 浮穴 正博 さん

### 1 はじめに

「人権」は自分にもあると意識して生きていない＝他人事ではない。食事を摂るのも、病院で受診するのも憲法で保障された「生きる権利の行使である」とは思っていない。

ある被差別部落がおかれた環境を「かわいそう」と表現をした時に「それは差別だ」と指摘を受けた。たしかにつまずいてこけて泣いている子どもをみての「かわいそう」とは違う。また、身体を使った表現はさまざまある。40代の男女に対し「未婚・既婚」や子どもの有無を聞くのもいかなものか。そういったことを通して「人権」をとらえていきたい。



### 2 ことばとどう向き合うか

別紙資料を読み、各自で引っかけた箇所、話題にしたい箇所についての思いを話す。その後2度にわたって別の人とグループを組みなおし、話し合う。最後にはじめのグループに戻り他のグループで話し合う中で気づいたことを話し合う。〈いくつかの着眼点〉

- ・「ことば」で、辛い体験を持つ人がいるという重い事実

を受け止めて向き合う。

- ・判断は、他者に委ねてはならない。判断するのはあくまでも表現者自身でありたい。
- ・自分が考える普通と、相手が考える普通の生活は同じではない。
- ・被差別当事者が語ることばを「正解」として受け止めるだけで、自分の中にある疑問や理解できていないことに対して向き合おうとしてこなかった自分自身。

### 3 差別と差別表現をどうみるか

〈第2ラウンド後、講師からの提起〉

「難しいなあ」という声も聞いたが、その言葉で思考停止していないだろうか。例えば、聴覚障がい者が自身のことを「ツンボ」と称したとする。これは差別か否か。個人的には差別ではないが差別語ではある、と考えている。ことばが使われる状況、ことばをやり取りする人との関係において、さまざまとらえ方がある。

### 4 まとめ

人権意識の高揚に伴い、言葉・表現の規制も厳しくなっている。しかし「ことば」自体には問題はない。人は人を貶めたり、差別しようと思ったらどんな方法を使ってでもするものだ。人権感覚を研ぎ澄まし続けることが、問題の解決へつながる。

地域リーダー養成コース 1月30日(木)

生きている 生きていく

～東日本大震災ビッグパレットふくしま避難所が教えてくれたこと～

◇講師 天野 和彦 さん [元ビッグパレットふくしま避難所県運営支援チーム  
福島大学うつくしまふくしま未来支援センター]

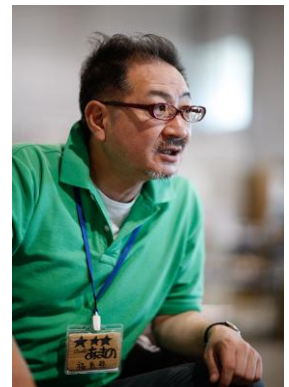
## 1. ゼロ(0)からプラス(+)に変えるきっかけづくり

東日本大震災は、多くの人命を奪い、自然環境を破壊した。

「生きる」とは一体、どういうことなのだろうか。

「ふるさと」がなくなるということはどういうことなのだろうか。

「ふるさと」という言葉があります。自分が通っていた小学校や中学校があり、そこまでの道のりがあります。一人ひとりにふるさとがあって、その思い出の場所があります。今回の震災はその大切なふるさとがなくなってしまうかもしれない・・・そして、その状況の中で、言葉にすると薄っぺらいけれど『寄り添う』という言葉の意味が、自分の中で現実には迫ってきた。



## 2. ビッグパレットふくしま避難所での様子

コンベンションホールの広い天井板は落ち、危険な状態で、エレベーターは使えないため、高齢者や体の不自由な人が上の階にいたり、トイレの前も居住スペースになっていたり、避難者の状況や衛生面への配慮もされていない。

既に、体調を崩す人も出始めており、ノロウイルスの疑いのある患者があらわれ、感染性胃腸炎も起きた。これ以上の集団感染は防がねばならない。「このままでは誰かが死ぬ。誰も死なせてはならない。」‘生命を守る’そこからの出発だった。震災から1ヵ月経った避難所の生活環境は、我が目を疑うほど劣悪なものだった。

生命を守るためには、ショートゴールとしての生活支援と生命を守る基礎づくりが重要である。大規模避難所が危機に追い込まれた中では、時間が止まった場所での交流の場の提供と、自治活動への促進が必要であった。そこで阪神・淡路大震災や中越沖地震時の教訓から、孤独死などを防ぐために、おたがいさまセンターを設立した。

そしてもうひとつ大切なことがある。災害弱者である子どもについてである。足りない情報と、先の見えない生活の狭間で荒れる子どもたちを支えること、子どもを守ることが、子どもにつながる親や地域を守ることに繋がっていくのである。

## 3. フクシマと被災者のこれから

震災直後の大変な時期をビッグパレットふくしまの避難所とともに過ごした約2500人の人々は、現在では県内外の民間借り上げ住宅、県内の仮設住宅、親族の家などで暮らし、避難区域の解除で自宅に戻る人もおり、それぞれの場所で次の生活に向けて歩き出している。

震災から約2年が過ぎ、震災直後に比べ、災害に対する意識が薄れてきている。けれども、東日本大震災の被災者である我々は、単にそれを嘆くのではなく、外に向けて発信していかなければならない。

地域リーダー養成コース 3月16日(土)  
ステレオタイプ(固定されたイメージ)の社会心理学  
講師 上瀬 由美子 さん  
(立正大学 心理学部 教授)



## はじめに

たとえば誰かに道を尋ねようと思ったとき、見た目がやさしそうに見える人と、強面の人がいたら、前者に声をかけますよね。また飲み会の席で友達になれそうな人を探すとき、洋服などの好みが似ている人を選ぶのではないのでしょうか。ほかに、相手の血液型や出身地を聞いて「血液型がO型の方はマイペース」「〇〇県出身の方はせっかち」などと思ったことはありませんか？見た目や他の物・人からの情報(インターネットやうわさなど)で、相手や集団のイメージを作りあげて「ステレオタイプ」といい、私たちは普段、無意識のうちに「ステレオタイプ」を使用しています。

## ステレオタイプとは？

ステレオタイプは元々社会学の用語で、「紋切型態度」とも言います。語源は印刷のステロ版(鉛版)で、「ステロ」には、「固定・固い」という意味があり、判で押したように同じ考えや態度、見方が多くの人に浸透している状態を言います。

## 私たちは、なぜステレオタイプを使用するのか？

私たちは、見知らぬ人や集団に出会った時、相手に関するさまざまな情報をもとに「こんな人や集団ではないか」というイメージを頭の中に作りあげて対応を考えます。そのような時、性別や年齢など特定のカテゴリーに含まれる人たちに対する固定化されたイメージ(ステレオタイプ)は、相手の対応を予測し、行動を理解するのに便利なものとして使われるのです。

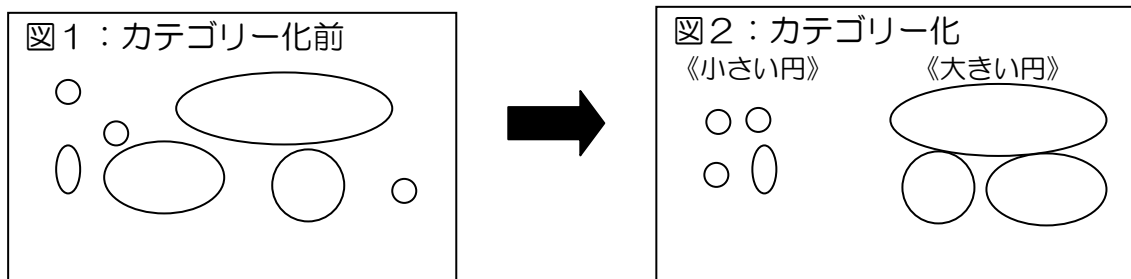


図1のように、「いろいろな円」がある場合、このままでは状況を把握しづらく、記憶しにくいですが、図2のように「小さい円が4つ、大きい円が3つ」とカテゴリー化すると、

図1に比べて整理され、認知しやすくなります。このように人や集団をカテゴリーに基づいてグループ化し、単純な形で理解しようとする心理があり、こういった心理がステレオタイプを生み出し、利用させるように私たちを動かしているのです。

## ステレオタイプの問題点

正しい情報・知識に基づいて物事や個人、集団をグループ化し、単純化する作業は、

たしかに認識するうえで、理解を助けますが、逆に間違っただ情報やカテゴリーに基づいて人や集団をグループ化すると、偏見や差別を生み出し、助長させることになります。

現在では多くの人が持つ観念に、ステレオタイプの代表例が存在しています。

## ※ ステレオタイプの代表例（血液型性格分類）について

ステレオタイプの代表例として、日本で有名なものの一つに血液型性格分類（性格診断）があります。これは「A型の人はいんげん、B型の人はいんげん、O型の人はいんげん、AB型の人はいんげん」といったもので、現在でも「血液型と性格・相性の関係」を取りあげた内容の本や雑誌が多数販売されています。

「単なる遊びだから、問題ないんじゃないの？」と言われる人も多いと思いますが、血液型性格判断が問題なのは、「科学的に妥当でない」ことよりも、むしろそれが差別的な構造を持っているということです。日本人の血液型分布は、おおよそ

$$A : O : B : AB = 4 : 3 : 2 : 1$$

となっており、血液型性格判断には、認知的な側面だけでなく、感情的な側面があることが明らかにされています。つまり、「AB型の人とはウマが合わない」とか、「結婚するならO型の人がいい」というような価値判断を含んでいることです。

また多数派であるA・O型の性格は社会的に望ましいものとされる反面、少数派であるAB型は、悪い性格特性と結びつけられることが多いことも指摘されています。

その他、性別・身体的特徴・人種・肌の色・国籍など、さまざまなステレオタイプが存在しており、間違っただ偏見や差別的な固定観念を助長しているものも少なくありません。

## ステレオタイプを解消するには？

私は高校生の頃、ドイツの心理学研究者、エーリッヒ・フロムの「自由からの逃走」という本に出会いました。ナチスドイツの時代、なぜ当時のドイツ人は、ヒトラーのような独裁者たちに自分の意思を委ね、ユダヤ人の迫害・虐殺に賛成したのか、といったことを分析している名著です。これを読んで、「社会で生きる個々人は、社会状況に多大な影響を受けている」といった観念に興味をもち、勉強したいと思ったのがはじまりでした。

ステレオタイプや偏見を解消するのは簡単なことではありませんが、まず「人は誰でもステレオタイプを使っており、社会にあふれている」ことを認識することから始めていくことが重要であると思います。一方、ステレオタイプはマイナスに作用するだけでなく、固定化されたイメージを良いイメージに転換させることも可能です。ステレオタイプやカテゴリー化は物事をとらえるときの基本であるため、「解消する」のではなくプラスに作用させることで偏見を減らすことにつながります。

私たちにとって大切なのは、常に相手や物事の本質を見るよう心がけることではないでしょうか。



講演会コース 12月16日(土)  
「橋はかかる」～差別のない社会をめざして～  
講師 栗原 美和子 さん  
(テレビドラマプロデューサー・作家)



## はじめに

皆さんこんにちは。栗原美和子と申します。本業はテレビドラマプロデューサーで7、8年前からドラマの脚本や随筆、小説といった執筆活動をしています。今から4年前の2008年10月に《太郎が恋をする頃までには》という私小説を出版しました。現在でもこの国に根深く残っている部落差別の問題、そこから生じる結婚差別に焦点をあてたものです。今日は、私たち夫婦が私小説を出版するに至るまでの事や、出版して以降、私たち夫婦に起きた環境の変化、そして私たち夫婦自身の心情の変化を、皆さんにお話させていただきます。

## 2007年 出会い そして 入籍

29歳でテレビドラマのプロデューサーになり、社会で未解決とされている問題、弱者と呼ばれている方々等をテーマにドラマを作ってきました。このような題材を取り扱う以上は、決して中途半端な知識や覚悟で取り組んではいけないということを肝に銘じてきました。当事者と一緒にいろんな話し合いをしながら脚本を作り、映像化してきました。私自身の経験から、在日外国人問題を取り上げたドラマを制作して問題提起をしてきました。その後、マスメディアが在日外国人問題と並んでタブー視している部落問題をテーマに取り組みたいと思いますが、なかなか当事者と出会うことができませんでした。

42歳の時に人間と動物の絆がテーマのドラマをつくるため、村崎太郎さんと出会いました。その仕事が終わった直後に村崎太郎さんからプロポーズされ、お付き合いを始めました。しばらくして、被差別部落の出身であることを告げられました。それまで彼は、「プロデューサーである私」や「プロポーズをした相手である私」に、自分の出自を知られる事に怯えていたのです。彼は、今まで自分の出自を打ち明けなければいけないシチュエーションと、打ち明けてはいけないシチュエーションをかき分けながら判断し、とても辛い思いをしながら生きていたのです。彼と結婚しようと思ったのは、この国が抱えている部落問題、その歴史と結婚しようと思ったからです。それが2007年の7月のことでした。

## 2008年 絶望 そして 旅立ち

私小説を出版しカミングアウトするという大きな決意で、私の両親に打ち明けたのですが、母親に大反対され、「親子の縁を切る」とまで言われました。それでも勇気を出して行動を起こしてみましたが、マスメディアからは全く無視されました。うさん臭いというレッテルを貼られ、隅っこに追いやられました。彼のこの国に対しての不信感は絶頂に達し、絶望感というものになりました。村崎太郎は壊れました。悲しみ、怒り、やり場のない憤りは、私に向けられました。私は、『諦めるのは早いですよ。頑張りましょうよ。』と投げかけましたが、『当事者じゃないあなたには、今の苦しみは全然わからない』と怒鳴られました。『あなたはまだ橋を渡って、あちら側に帰れるから。』と言われました。『川のあちら側とこちら側の人間が手を組んで何かをやれば、きっと新しい橋が架けられるんじゃないの。』と、私はかなり強く言いました。彼は驚き、彼



自身の差別に気づき、謝ってくれました。私たちは、一気にこの国を変えたいと思って行動を起こしたけれど、そんな力は全くありませんでした。私たちは、小さな力で出来る事を重ね、いつか本当の意味で、この国から部落差別が解決されることを願って、一緒に人生を共にしていきましょうと、改めて誓い合いました。これが 2008 年の暮れのことです。

## 2009年 変化 そして 希望

2009年4月、夫婦にとって2冊目の私小説を出版しました。マスメディアはあてにせず、彼は相方の猿の次郎君と二人で、猿回しの道具と 2 冊の本を持って、全国を旅するようになりました。彼なりに始めた、小さな力で出来ることです。いろんな人が賛同してくれ、どんどん仲間が増えていきました。二人きりだった私たち夫婦の周囲に、100名ほどの方々が集ってくれるようになりました。2010年のNHKの番組で、部落差別の問題が全国ネットで生放送されました。放送された時間は短いかもしれないけど、私たち夫婦にとっては、歴史的な意義のある時間でした。大反対していた母親の心が動き「頑張ったわね。」と言ってくれました。『諦めないで何度でもぶつかり、向き合っていけば本当に人の気持ちは変わるんだ』と、太郎さんから教わりました。私たちは、また強くなりました。2010年の6月に、夫婦にとっての三冊目の私小説を出版しました。『日本中の、世界中の人の心の中に橋が架かるといいな』という思いを込めて、タイトルを《橋はかかる》としました。全国学校図書館協議会の選定図書に認定され、全国の学校や図書館に置くことができました。これほど嬉しい事はないです。私たち夫婦にとっては、これから日本を背負っていく皆さんが、その本を読んでくださることが一番嬉しいことです。そうして2010年を終えました。

## 2012年 現在 そして 決意

2012年、それぞれがもう一度、エンターテインメントの世界で真ん中に返り咲かないといけないと決意し頑張りました。なぜ私たち夫婦が、エンターテインメントの世界で真ん中に返り咲かないといけないのか。それは、人権問題で多くの方々に耳を傾けてもらうためです。人権問題に興味のない人はとても多いです。でも、エンターテインメントに興味を抱く人は沢山います。我々が活躍すればするほど、私たちの話に耳を傾けてくれる人が増えるということです。「人権問題で闘っている」、「エンターテインメントで活躍する」、その二つのバランスで、また頑張っていこうと決意しました。

## おわりに

人の心は動かします。人の心を動かせるのは、人の心の力でしかないと思います。ここにいる皆さんお一人お一人の力で、いろんな人の心を動かしていただきたい。3人でも、5人でも伝えていっていただきたい。そういう意識を、多くの人を持つようになったら、いつか本当の意味で、この国で、部落差別が解決されるのではないか。本当の意味で、この国は世界に誇れる、心豊かな先進国になるのではないかと願っています。

講演会コース 2月 9日(土)

## 「社会と個人の成熟度と日本の未熟度」

講師 齊藤 環さん(精神科医)

### 1 はじめに

わたしは精神科医で専門は「引きこもり」です。このことについてはいろんなご意見があります。「就労の義務を果たしていない」或いは「納税の義務を果たしていない」という批判的なご意見が多いと思います。公式には70万人いるといわれていますから実際には少なくともその倍はいると思われます。ここでみなさんに問いかけです。引きこもりの若者たちはみなさんと同等の権利を持つべきでしょうか。残念ながらいまの日本社会では「社会に対する相応の義務を果たさない人間は人権を剥奪されても仕方ない」という発想が優位になりつつあるように思います。しかし、権利と義務をセットにするやり方は間違いです。文明が進歩した社会においては、いわゆる「天賦人権説」と言われるように、「人間」と名のつく存在には全て付与されて然るべきものが人権です。「不愉快」な人間でも人並みに生きる権利がある。感情と原理は分けて考える発想が基本になります。



### 2 非社会性に進む日本社会

「最近の若者は凶暴化している」というイメージがありますが、それは間違いです。若者の犯罪率のグラフでは、1960年代がピークでそれから減少して、'80年代以降はほぼ横ばいです。むしろ青少年は異常なほどおとなしくなっているのが現状です。社会に反発する元気もなければ、社会とコミットメントを果たす元気もないということです。次にフリーターやニートの数の推移は、10年横ばい。生涯非婚率の推移は、2000年時点で男性12.4%、女性5.8%でこれがさらに高くなっており、ある試算では2030年には50台以上の男性25%が未婚という結果が出ています。不本意な単身が長期化すると心身に悪い影響を及ぼす場合があります。そういった意味では恐ろしい数字です。若い人を中心に日本は、非社会性の方向に進んでいるといえます。

### 3 社会問題としての引きこもり

引きこもりの方々を対象にした調査研究の結果です。初発年齢は平均で20.3歳。職場にうまく適応できなくて引きこもるというパターンが急増しています。20年前はなかったパターンです。初診時年齢は27.3歳です。世間体とか偏見などの阻害要因が重なって、初診までに7年かかる状況になっており、精神医療に対する偏見が根強いということです。これもある種の日本の未熟性を現しています。現在年齢は32.6歳。かつては21歳でした。これはすでに青少年問題と言えるのかためらうほどです。性別は男性が8割と非常に多い。知能体力といった潜在能力は高い。ではなぜそのような人が社会に適応できないのか。引きこもりの定義は「家から一步も出られない」のではなく「社会参加していない」ということです。長期化した引きこもりが自力だけで社会参加していくケースは極めてまれです。自助努力だけではどうにもならないということです。日本社会の弱者に対する抑圧構造が大変な害悪となっているのしかかっています。「働かざるもの食うべからず」ということばは立派なように聞こえますが、もはやそういうことでは乗り切れない社会になっていることをご理解いただきたい。

## 4 思春期青年期の変容とアイデンティティの拡散

若者の未成熟化は実は全世界的な現象であって、日本だけの問題ではありません。自分探しを続ける若者が増えたと言うことです。その原因のひとつとしてどの国でも言えるのが教育期間の増加です。つまり、学生でいる期間が増えた（モラトリアム）ということです。自己決定をしなくてもよい期間が増えたことによって、未成熟化するのには当然です。「社会の成熟度と個人の成熟度は反比例する」ということで、社会の発展とともにわれわれは未成熟化するしかなかったということです。未成熟には二つの傾向があります。一方は未成熟であるがゆえに社会に反発する「反社会的傾向」もうひとつは社会にかかわらない「非社会的傾向」です。日本においては未成熟さが「非社会的傾向」をとっているという問題なのです。個人の心の問題だけではもはや引きこもりやニートの問題は語れないほど、この問題は構造的であるということです。そしてその責任の一端は私たちにあるということを知るためにも、「社会的排除」の問題であるという視点を忘れるべきでないと思います。

## 5 非社会的傾向と人権意識



世界中で若者における「非社会的傾向」が進んでいます。若い世代で「新型うつ病」がはやっていっているのも社会参加に対する忌避的現状の現われと言えると思います。フリーターもニートどちらも弱者ですから「社会から排除されようとしている若者」として何らかの福祉施策（社会に包摂する）が必要だと思えます。社会的排除の問題で最も恐ろしいのは自分自身の排除です。弱者の立場にいる人ほど自分自身を否定するということです。なぜそうなるのかというと、連帯をしないことが大変大きい原因です。なぜ連帯しないかということ、彼らは互いに互いのことを軽蔑するからです。これも最初に言った間違った人権意識といえます。だからこそ「人間は存在するだけで人権があるのだ」ということを教育というレベルできちんと保障すべきだと思うのです。どういう状態にあっても互いを尊重できることが必要です。連帯は重要です。他者からの承認は自信の底をつくるのです。それができるかどうかで行動力に大きな差がつきます。

## 6 差別の問題は教育の問題

「子どもは自然に育てば平等主義的に育つんだ」という考えは間違っています。これは統計でも証明されています。差別に関する教育を受けずに育った子は差別的な人間に育つそうです。違和感を持った子をいじめるなどの行為を自然にやってしまうそうです。「してはいけない」ということを意識的に教育しなければ差別はなくなるのではありません。

## 7 若者の苦しみの構造葛藤の現状

若者が仕事を求めるのは他者からの承認欲求であり、認めてもらえる仕事を選ぼうとする。「食うに困れば働かだろ」は通用しません。苦しみの構造や葛藤の内容が変化していることを知らなければならないということです。孤立を避けるために大事なことは人権感覚と社会関係資本（利害のない人間関係）のメンテナンスです。

2013 年（平成 25 年）10 月発行

【問合せ先】

福山市市民局まちづくり推進部  
人 権 推 進 課

TEL 084-928-1006